


## 5. 座右の銘

宮田ルームサービスの事務所の壁に、古びて色褪せたチラシが貼ってある。よく見ると、大鵬薬品工業(株)  のチオピタドリンクの宣伝用チラシである。昔、誰かにもらって、それ以来その場所にあるらしい。なぜ大切に貼られているのか。そこに書いてある文章が宮田正志氏のお気に入りだからである。

暗いうちから起きだして  
不平不満を口にせず  
働いて働いて  
夢と希望を大切に  
働いて働いて…  
やっとここまで来たけれど  
働くだけが人生か…？  
お疲れさまの日本に  
愛情一本  
チオピタドリンク

大鵬薬品工業(株)より



チオピタドリンクのチラシに書かれたイラスト

「忠実に働くだけやわい。お客さんの話をよく聞いて、文句言われてもよく聞いて、絶対に『できんわ』と言わん。お客さんが納得するように仕事をする。そういうふうになると、お客さんが増えて

も逃げていかんのやわ。」忠実に働いて働いて、宮田氏は信頼を獲得してきた。

そして、もうひとつの座右の銘が、「毎日が真剣勝負」である。宮田氏ほどの職人であっても、「仕事にやり直しはなく、真剣勝負で毎回臨まなければ明日はない」という危機感のなかで仕事をこなしている。「お客さんから、お前来てても機械が直らん言われたら、早く引退せないかん。そんなこと言われんうちに引退せんと商売ならん」と、宮田氏はつねに厳しい状況に自らの身を置く。



事務所の一角に貼られてある

「チオビタドリンク」のチラシ

機械いじりに明け暮れ、数字の管理にはめっぽう弱い宮田氏は、利益を度外視した請求書を書くたびに、会社の経理を一手に担っている妻の栄子氏とケンカになる。「利益は二の次でやってきたから、よう儲けんのよ。そりゃこの仕事、朝から晩までやってしんどい目したから、5万円はもらわんといかんと思っても、請求書を準備する段階になって、やっぱり5万円は高いな、4万円にしとけや、3万円にしとけやってなるんよ。だから、お母さんとケンカせないかん（笑）。」笑いながらそう話す宮田氏であるが、「お客さんに、お前のところは高いからよそに言おわい」と言われたら競争に負ける、という危機感をつねに抱いている。

内助の功で宮田ルームサービスを支えてきた同い年の栄子氏とは2017年で結婚50周年、金婚式を迎える。栄子氏は、宮田氏の独立時から陰の立役者として宮田氏をサポートしてきた。宮田ルームサービスは、宮田氏と栄子氏の二人三脚でここまできたのである。

「夢と希望を大切に、働いて働いて、働くだけが人生か？」とチオビタドリンクのチラシにあるが、宮田氏は忙しい合間をぬって趣味に興じる時間もきちんと確保している。現在の趣味は茶道である。

茶道に使う囲炉裏は宮田氏の手づくりである。囲炉裏をつくった際に、ピザ釜も手づくりした。庭には立派なピザ釜が鎮座しており、その釜で栄子氏がピザを焼く。仕事の外でも、栄子氏と分業しながら休日を楽しむ。なんとも穏やかなやさしい時間がそこには流れている。



庭に鎮座するピザ釜

## 6. 若い世代に向けてのメッセージ

宮田氏から若い世代へのメッセージは、「何事にも興味を持つこと！」である。好奇心が旺盛なことで、チャレンジ精神も生まれる。仕事をするうえでは大切な心構えである。

しかし、宮田氏が「とにかく機械を見て興味を持ってくれたら、そりゃ伸びるけど、持たんからもうだめやね」と吐露するように、若い世代の人材育成はなかなかハードルが高い。しかも、土日出勤もいとわな仕事内容となるとなおさらである。宮田氏の経験と勘によると、「昨今の若い世代は仕事の内容よりも土日が休日か否かを重視する傾向」にあると言う。それでも、「なんとかせなあかん」と焦りつつ、「こればかりは経験積んでいかんとあかん。基礎がわかってないとあかんからテキストやマニュアルをつくるといっても作業としてはかなり難しい」ので、独立してから忘れないように紙に書いて記録は残してはいるものの、マニュアルとまではいかない。

このような状況のなかで、機械メーカーは自社が製造する機械については、設置やメンテナンス、修理に技術者のいない機械への開発を目指している。その理由は、技術者不足はタオル業界のみならず機械メーカーにとっても深刻だからである。

「タオル業界の人材不足にかかわらず、若い世代には『何事にも興味を持って、夢と希望を大切に』働くことが楽しいと思える仕事を見つけ出してほしい。」宮田氏のメッセージである。

## 7. お薦めの本

宮田氏は365日、タオルのことを考えている。とくに、日課の早朝散歩は頭のなかを整理する絶好の時間である。それゆえ、宮田氏がよく手にとる本は仕事の延長線上にある。今回紹介してもらった2冊の本は、いずれもタオルのデザインにヒントを与えてくれるものである。「織物が載っている本は、本屋に行ってよく買うてくるんよね。こういうデザインをタオルに入れようかとか、これ面白いと思ったら織ってみるんよ。」



「月刊染織α」No. 307(2006年10月号)

染織と生活社、2006年。

1冊目の『もっと手軽に手織りを楽しむ』(雄鶏社、2003年)は、4人の作家たちの作品を掲載して、オリジナルの布づくりを目指す人たちのレッスン本である。個性ある織物の写真がたくさん掲載されており、わかりやすく視覚に訴える構成となっている(雄鶏社は2009年に東京地裁に自己破産申請し現在は存在しない)。2冊目の「月刊染織α」(染織と生活社)は、染織と生活社による国内外の染織文化を紹介する専門誌であり、1981年4月(創刊号)から2007

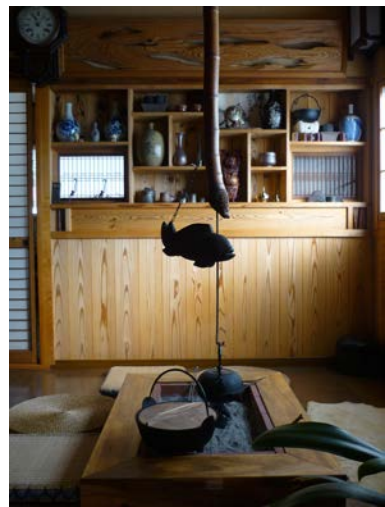
年8月号（No. 317）まで発刊された。

どこまでも仕事人間である。たとえば、誰かに「お前、何のためにそこまでやるんぞ」と聞かれたら、「生活のためや」と答えるそうである。茶目っ気があり照れ屋である宮田氏は、「働くことは生きること」を、その生き様をとおしてわれわれに教えてくれる。（完）

### 編集後記

インタビューを終えたあと、宮田さんは「宮田ルームサービスの看板を見て、『ルームゆうて、どんな仕事しよんで？家の掃除でもしよん？』とよく言われるんですよ」と、少し苦笑いしながら話をしてくれました。その表情がなんとも印象的で、苦笑いのなかにも余裕を感じられたのは仕事への誇りからであろう。それにしても、音だけ聞くと「ルーム」＝「ROOM」＝「部屋」を連想してしまいがちであり、多くの方は「ルームサービス」を「ROOM SERVICE」と勘違いして、宮田ルームサービスを部屋掃除屋と間違えるのはなるほどです。正しくは、「LOOM」＝「機料」です。

茶の精神に「侘び寂び」がありますが、これは「地味」を愛でる感覚を意味するそうです。地味とは飾り気がなくて控え目なこと、目立とうとしないこと、です。宮田さんのお仕事は、縁の下の力持ちで表に出ず「地味」だけれど、その地味を愉快と感じる宮田さんは茶人なのです。実に宮田さんの趣味は、茶を楽しむこと。いまは忙しくて空いた時間に自己流で茶を入れて飲むそうですが、自宅には手づくりの茶室があり、静謐な空気がそこには流れています。仕事では緊張を強いられる毎日ですが、茶の時間をとおして精神のバランスをとる、これもプロフェッショナルとしての自己コントロール術です。（辻）



## 次回の「タオルびと」

「タオルびと」の17人目は、城南織物(株)代表取締役の平尾浩一郎氏である。JAPANブランド事業のあとを受けて2009年から2012年まで四国タオル工業組合理事長に就任し、タオルマイスター制度の確立、青山ショップの開設、海外展示会への出展など、さらなる今治ブランドの訴求に奔走。理事長時代の仕事内容にくわえ、阿部会社にも繋がる城南織物の歴史についてもとり上げる。



## 追記

今治では数少ない機料品店を営んでいた宮田正志さんが、2025年4月1日にご逝去されました。突然の訃報に、今治のタオル業界は驚きを隠せませんでした。幼少時代からモノづくりや機械いじりが大好きで、それを生涯の仕事にし、今治タオルのために長年働いてきました。産地にとって貴重な人材をまたひとり失いましたが、宮田さんのこれまでの数多くの功績を讃えたいとおもいます。おつかれさまでした。